

JCS/TAWC 受賞者の学会参加報告(AHA2017)

循環器内科女性医師の快適な海外発表

東京大学循環器内科 中 山 敦 子
なか やま あつ こ

この度は、光栄にも第3回 Travel Award for Women Cardiologists (JCS/TAWC) にお選びいただき大変感謝いたします。American Heart Association Scientific Sessions Conference (AHA) 参加のためにアメリカへ渡航にするにあたってとても勇気づけられる思いがいたしました。AHAは今回で6回目、計11題目の発表になりますが、今後も世界中の研究者と交流を継続できるよう、また循環器分野が発展するように精進してまいりたいと存じます。

AHAは、1924年に心臓病と脳卒中と戦うためにつくられた世界最古・最大の学会で、循環器疾患の様々なガイドラインを発表し、世界中の人々の健康、人生に貢献をしている。AHAのCEOはなんと女性であるNancy Brown博士である。16名の学会理事のうち、5名が女性という日本では考えにくい構成で世界最大の学会をリードして

いる。National Institutes of Health (NIH) の前CEOであるJuli Anneも女性であったので、世界に目を向けると驚かされる。幼少時にカリフォルニア州サンノゼで過ごした私は、先生たちに女性性は男性の倍頑張るってようやく同じ評価になると言われてきたが、当時その意味を知らなかった。ミシガン州の高校に留学した際は、授業で（恥ずかしがりやの私でも）自分の意見を言えるまで帰してくれなかった。「意見はないです」と言ったら、絶対あるはずだと先生に言われ、赤面しながら私が発言するまで生徒全員が待っているのだ。AHAへ行くとそのような日々が思い出され、その土壌で優秀な研究者は伸びていくのだろうと思われる。

今回のAHA2017はカリフォルニア州アナハイムで11月11日～15日に開催され、100箇国以上から18,000人以上の参加者が出席した。各種臨床試



図1

験の成果が発表されたが、なんといっても FOURIER 試験が大きく注目された。心筋梗塞や末梢血管疾患患者ではスタチン単剤と比較し、エボロクマブ併用によるイベント抑制効果が大きいことが、Brigham and Women's Hospital の Dr. Marc Sabatine や Dr. Marc Bonaca によって発表された。更に REAL-CAD 試験より、日本人の冠動脈疾患患者において、高用量ピタバスタチンによる治療が血管イベントを減少させたことを京都大学の木村剛先生が発表され、日本が世界に発信するエビデンスを目の当たりにした。また、14年ぶりに AHA/ACC 高血圧のガイドラインの改訂が発表され、高血圧の基準が130/80 mmHg へと下方修正されたこともトピックであった。

私が発表した心臓リハビリテーション（心リハ）の分野では、口述は10人中8人が日本からの発表であり、海外からは Dr. Leslie らの研究グループが、遅延 Na カレントの選択的阻害であるラノラジンと運動療法の組み合わせで、最大酸素摂取量や QOL が改善されることを発表した。今回の私の研究は、ありがたいことにポスター会場でも多くの研究者から（一時列ができるほど）注目を浴び、AHA daily newspaper に取材された。私の研究は「心リハを行った腹部大動脈瘤患者はその後長期にわたって瘤拡大速度が小さく、手術待機時間が長くなった」というものであった。同じ試みが Stanford 大学で行われ、あまりうまくいっていないと研究者間の噂で聞いていたが、運動時の最大収縮期血圧を制限したことによって結

果がでたと思われた。Marfan モデルのマウスで運動によって大血管拡大を抑制したことを発表した Dr. Christine Gibson にも会い、お互いに etiology の解明まで考えて研究を組んでいなかったことに苦笑いし、etiology は何か？と長く議論した。日本からは後藤葉一先生（心リハ学会理事長）もこられ、鋭いご質問に答えきれないということもあった。このような最先端での研究者間での交流は AHA ならではである。現段階での秘密情報をお互いに少しだけ話してしまうのも、利害関係なく知りたいという気持ちが強いからだと思った。

1歳児を母と AHA まで連れていった話は、第82回日本循環器学会学術集会での瀧原圭子先生を中心とした JCS-JJC 創設セッションで発表させていただいており、割愛する。アナハイムは学会会場のすぐ隣にディズニーランドがあり、異国の子供同士で交流の真似事のような風景もあった。今世界で人種差などが再び争いの元となっており、学会でのテロ発生も危惧されたが、AHA での交流は、病気を治すことをいっしょに考えるという点で誰もが一致している気がした。会場外の噴水広場で、色の違う子供たちが遊ぶのを見ながら、その場にいた母親同士で談笑したが、きっと思いは皆同じだったと思う。‘May peace be in the world.’

著者の COI (conflicts of interest) 開示：本論文発表内容に関連して特に申告なし

*

*

*